
少年少女物語 + ただし魔法有り

雄町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女物語 + ただし魔法有り

【Nコード】

N2407Z

【作者名】

雄町

【あらすじ】

+ 『景山辰也』と少年少女の物語。ただし魔法有り。Arcadiaにも同様の小説を掲載しています。

第零話 とある糞ガキとの出会い

「わたしも、なかまにいられてください」

「帰れ糞ガキ」

「まあまあ」

俺の前でガキが唸る。ちびっこい、六つか七つぐらいのガキ。いつちよ前にどつかから拾ってきた拳銃を両手で抱えて、じっと俺らの方を見つめている。

「君は確か、この村の生き残りの」

「マナ、マナ・アルカナ」

「そうそう、マナちゃんだったっけ。どうしてマナちゃんは僕たちの仲間にいられて欲しいんだい？」

「ケケケ、どーせ口だけだろ」

「ちがう」

「またまたー、そんなふてちゃってさあ」

「さわるな」

ぷにぷにほつぺたを触る俺の手をはねて、不機嫌そうにガキは言う。

「かつちーん。おにーさんもんなこと言われると怒っちまうよ」

「じじい」

「誰がジジイだ？ 言葉使いに気をつけろよガキ」

「辰也、子供に本気になるのはどうかと思うけどね」

「こどもじゃない、マナ」

「うん、悪かった悪かった。マナちゃんはマナちゃんだもんね」

「そう」

「うぜえ」

「じじい」

「マジでうぜえ」

じろりと俺を睨むガキ。そんなところがガキだったの。ケケケ、どんなに取り繕うともテメエはガキでガキだったの。そんな反応がまさに、だぺう！

「こっこつつ」

「……はあ、自業自得だね」

「ふん」

股間が……俺のもっこりがっ！ 突き出したガキの拳が俺のもっこりを……。

「マナちゃん、君はどうしてそんなことを言うんだい？ 僕たちがどんな人間かは、君も分かっているはずだろう？」

「せいぎのみかた」

「あははっ、そう言ってもらえたらすぐくっつけたいよ」

そういうと男、幸樹は膝を曲げてガキの目線に合わせる。こんなガキにんな真似しなくてもいいつてのによ。相変わらずに優しい奴だわな。

「お父さんとお母さんは？」

「うたれてしんだ。いくところない」

「だから仲間にいれて欲しいの？」

「そう」

幸樹はそんなガキの言葉ににこりと笑う。

「だったら孤児院いけよ。へーんなどこじゃなく、ちゃんとしたとこなんだからよ。それがいい、そうしろ、テメエ以外はみんな行くんだしょ」

「やだ」

「うわ、うぜえ」

「じじい」

「やっぱうぜえ」

「辰也、君もうざいよ」

「oh」

へこむ俺を気にせずに、ガキと幸樹の会話は進む。ガキの言い分を要約するところだ。自分は目の前で両親を殺された。そしてその時自分も殺されそうになったんだがうちの人間、つまりNGO団体『カンパヌラエ・テトラコルドネス四音階の組み鈴』の団員に救われたそうだ。だから生き残った自分が今度は誰かを救いたい……だそうだ。まあ何ともガキらしい言い分だな。ヒーローに救われたからヒーローになりたいって言うてるわけだし。ちなみにうちは武闘派の団体で、おもにテロリストやら妙な考え抱いてる阿保どもを武力介入で潰すつてのが主な役割。そのあとアフターケアをする団体に助けられた奴らに移したり、殺さず捕まえた奴らを収容所にぶち込むのが仕事。まあ俺は別の団体から来てる、いわゆる派遣社員みたいなもんだけどな。

「ケケケ……幸樹、言ってやれや。ここはテメエが来る世界じゃねえ……ってなんで泣いてんの？」

「僕は今、猛烈に感動している！」

そーいやこいつも戦災孤児だっけ？ たしかこつちの世界に足を踏み入れたのも当時はヒラだったが、うちの団体の団長に助けられ

たのが原因で……。酔っ払いながら絡んできたときの話だからよく覚えてるわ。普段は温厚な癖によ、酒が入ればとーんだめんどくせえ野郎に早変わり。そのくせ酒が好きなんだからタチがわりい。

「マナちゃん、君のことは必ず僕が団長に話を通してあげるからね！」

「おいおい、幸樹よ本気か？」

「もちろんだとも。さあ、まずは団長のところに行こうか」

「うん」

ぎゅっと拳を握って気合入りまくりの好機をてかてかとガキが追う。その時ちらつと俺の方を見つめて、ガキはフンと鼻で笑って見せた。ああ、やっぱりこのガキうざいわ。

第一話 戦場で卒業するのはできるだけお早めに

団長には殴られ、大いに怒られたが何とかマナの入団は認められた。自分ももう18になり、団長に救われてから12年が経っている。僕が救われた時、団長は今の僕と同じくらいの年齢だった。そう考えるとマナの面倒を見ても、何ら問題はないと思う。家族である団体の人たちもいるし、団長もいるし、何よりあのとき一緒に殴られてくれた辰也がいる。僕の我儘につき合わせてしまった形にはなってしまったが、それでも僕と友達でいてくれる辰也には頭が上がらない。辰也が日本の関西呪術協会からやってきてもう一年が経つ。今度何かお礼を兼ねたお祝いをしなければ、と思う。

マナについては順調に育ってきている。ヒーローとなる術を見つける。それは同時に人よりも強い力を得て、人を虐げることのできる人間となる術を見つけることに等しい。だがその使い方さえ誤らなければ、人は誰だって誰かのヒーローになれると信じている。そのための優しさも、マナは兼ね備えているはずだ。……相変わらず辰也とは犬猿の仲のようだけど。

マナはどうやら純粋な人間ではないようだ。そもそもマナの村が狙われた原因も、彼女のような人外とのハーフが何人もその正体を隠して隠れ住んでる、そんな情報がどこから漏れ出し、戦闘兵器に、あるいは見世物や慰め物に、あるいはただ虐げるために。溢れんばかりの目先の欲望に囚われて、行動を起こしたのだから。彼らもまた何か別の道があったのではないだろうか、本当はいろんな事情があつて、仕方なく嫌々に、彼らはそんな行動に走ったのではないのだろうか。僕はいつもそんなことを考えてしまう。辰也に言わせればひどく下らないことらしいけど。相手が生きたいように自分も生きたい、相手が満たされたいように自分も満たされたい、だか

らぶつかるのは仕方がない……そう辰也は言う。僕は……どうしたいんだろうか。ともかくと、今はマナの話。そして二冊目に手が届きそうになったこの日記も、マナのことを書くためのものだ。僕の話はまた、お酒でも飲みながら辰也に愚痴ろうと思う。

マナは半魔族だからか、それとも元からの才能のためか。多少の魔力の扱い方は知っていたようにだけど、僕の教えを水が綿にしみ込むように吸収している。マナはどうやら普段から魔力が身体の中を廻っているようで、それを放出する、というのは少々苦手な様子。その反面、供給を行えば僕たち普通の魔法使いよりもずっと効率的に魔力を体に巡らせて、身体強化を行えるみたいだ。マナが僕たちの仲間になってから三カ月が経ったけど、彼女はもう高位魔法使い並みの身体強化を行っている。

でも、マナはそこで終わりだ。絶対的な魔力容量が並ほどしかない。もともと外界から自分の中へと供給し、利用できる魔力量には才能が起因している。人間の場合長年の練磨によってその容量を少しずつ上げることができるのだけど、半魔族のマナは成長によってその容量を上げることができないみたいだ。だったら魔法使いの路線は棄てて本来魔族が扱わない人間の体術をマナに覚えさせて武道家にすればいいじゃねえか、って辰也は提案したんだけど、マナはすぐさま否定した。……そんなに辰也のこと、嫌いなのかなあ。いつもいつもマナは辰也には対抗心剥き出し。普段は楽しそうにじゃれてるけど……ほとんどが辰也がマナをからかってるようだけどね。……まあもし武道家になったとしたら、強靱な肉体は持ち合わせているのかもしれないけれど、おそらく彼女は凡庸な人物で終わってしまうんだろう。魔力や気の量が何にせよとても大事になってくるから。

と、いうことでマナを成長させる方向性を考えなければならぬ

ことになったわけだ。そこで注目したのが本来魔族が何らかの形でもっている特殊能力、半魔族のマナにも例外なくそれは備わっていた。マナの眼は『魔眼』と呼ばれる類のものだった。ギリシャ神話で有名な『メドゥーサ』のような見た相手を石化させるもの、ケルト神話の『バロール』のように見た相手を殺すもの。古今東西、様々な神話や物語で、そして現在僕たちの生きるこの世界でも、いろいろな魔眼が世の中にはある。マナの魔眼は霊体や不可視に纏わせた魔法障壁、姿を隠す魔法みたいに本来見ることでできないはずのものを見る効果があるみたいだ。その副次効果としてひどく視力も強化される。そんななか白羽の矢が立ったのは、マナが僕たちの前に現れた時に抱えていたもの……『銃』だ。

銃には本来マナ程の子供では耐えることのできない反動があるんだけど、身体強化ができるマナにはそこは問題にならない。加えて魔眼がある。幾重にも魔法障壁を張っていたとしても、魔法で姿を消していたとしても、魔眼があればそれを貫けるだけの弾丸を撃ち出すことができる。もしも、これを完ぺきにマナがこなすことができたならば、彼女は現代の魔弾の射手としてきつと名を馳せるはずだ。だけど……銃はとても具体的な、人が人を殺すために技術の粋を集めて完成させた殺人兵器。彼女にこの使い方を教えるというのは、正直とても気が進まない。だけど僕は信じている。使う正しい心さえ伴えば、きつと銃は彼女のとてもしい相棒になるはずだと。

〈高宮幸樹 ある日の日記より抜粋〉

激しい音。ガキの手の中の鉄塊から飛び出してった弾は、100m先の空き缶にかすりもせず空を切った。

「ざまあ」

「……………」

「無言で狙撃銃をこっちに向けんな。頭悪いんですかあ糞ガキ」

俺の言葉にばいと狙撃銃を投げ捨てて、ガキは頬を膨らませた。

「やめた」

「意味わかんねーっての。テメエが練習したいからっつーからわざわざ俺が取りに行つてやつたんだろっつが」

「じじいがいるときがちる。できない。どっかいけ」

「おまつ……自分の言つたことを思い出せや」

「おぼえてない。どっかいけ」

「かーわいくねえの。故郷のテメエと同年のガキはもっとかわいげがあつたぞ？ それに根性もあつた」

「知らない。どっかいけ」

マジかわいくねー。いつも俺にじとーっと視線向けてきてる癖に

よ。あれか？ 恥ずかしがり屋さんか？ …… そりゃねえか、一緒に風呂にも入ってるし、俺と幸樹の間でいつも寝てるし。あゝあ、故郷のガキはかわいかったのにさあ。いつもいつもてててーつつて俺の後付いてきてくれてたし、鍛錬する時もずっと俺の姿見て、隣で一生懸命に真似しようとしてたし。そいえばこっちに来てもう一年近くか…… たった一つの任務だが、だいぶかかつちまったなあ。終わったらどーしよ？ って、俺が悩んでも仕方ねえな。俺が帰ったらあいつ、俺の顔忘れてねえだろうな。あんだけ大泣きされて、それで帰った忘れてましたーとかだったら俺は泣くよ？ いやマジで。

「どっかいけどっかいけどっかいけ」

「……あゝわかったわかった、どっか行ってやる」

「そつ……どっかいけ」

「ただ一つだけ、人生の先輩として教えといてやる。どんな物事もそうだが、練習しねえと上達せんぞ。たとえどんな状況でも、周りになんと言われても、頑張り続けれる奴が強くなるんだからな」

「しね」

「……うぜえ」

もういいや。とりあえず酒飲む。昼？ 関係ないね。幸樹誘って酒飲む、俺は決めた。

「魔法の射手 雷の32矢」

空を駆る幸樹の手から詠唱とともに放たれた三十二の弾丸。それに一拍遅れて、辰也は真っ直ぐと駆けだした。陸上選手、オリンピック金メダリスト真っ青な速度で大地を蹴る。待ち構えるように銃を構える男。標準を辰也の胸に合わせ引き金に指がかかった時、男の喉元には辰也の肘が突き刺さっていた。息を吐きだすことも許されず、急激に加速した速度からの肘は男を重力に逆らい一転二転、宙でくるり上下を反転させた。

「ふふっふん」

周りにいた男の仲間の銃口が辰也に向けられ、鉄の塊が音を超えて飛び出した。

「仲間撃つなんざ、どーかと思っぜえい」

飛び出した弾丸は盾にされた男を幾度も貫く。その光景に喚く男たちの仲間を尻目に、達也は気にもせず蜂の巣の肉袋を声の聞こえる方へと投げつけた。紅くまだ温かい血潮が透明な空気を彩る。地面が赤く染め上げられた時、男の仲間の一人が喉に肘を押し込まれ、くるりくるりと上下を反転させていた。再び蜂の巣状の肉袋が出来る、また誰かがくるりくるりと上下を反転させる。

「夢の中へ、夢の中へ……逝っちゃってるわ」

誰かの何かが切れて、男の仲間は狂ったように周囲に鉄を降らしだした。仲間にあたるともお構いなしに、目の前でくるりくるり仲間が回転して同士討ちしていく異様な光景に耐えられなかった。一緒に笑いあった仲間の額から血が吹き出る。一緒に酒を飲んだ仲間の胸から血が吹き出る。一緒に色街に繰り出した仲間の腕から血が吹き出る。一緒に商品を弄んだ仲間の足から血が吹き出る。そして視界の上の方に地面が現れて……そこで彼の意識は途切れた。

「探し物はなんですか」

後方で息のあるテロリストたちを捕縛魔法で捕える幸樹をちらと見て、辰也はまた駆け出す。前方で土煙りが高く上がるところへ向けて。見れば中世の時代、馬上の騎士が持っていたようなランスを携えた大柄な男が見えた。辰也が今籍を置いているNGO団体の現団長だ。

「見つけることはできましたが」

団長と辰也の間に一台のトラックが見えた。明後日の方向へとエンジンをつけ、走り出したトラックへと向けて、速度を落とすことなく宛らバツタ能力を得た改造人間のように足の裏から突っ込んだ。防弾ガラスは粉々に砕け散り、運転手の頬骨はごきりと折れた。

「トラックの中、荷台の中に」

グラリと車体が横に傾き、トラックは大きな音を立てて横転した。からからとタイヤが空に周る。揺れる車内でしっかりと運転手を締め落として、ドアを蹴破り外へと這い出る。

「探したけれど俺は狙われる」

ターンと音が一つ、辰也の方に一つ赤い筋が走った。そしてターンともう一つ音。200mほど先で、一人狙撃手が高台から転げ落ちるのが目に入った。

「糞ガキも処女を捨てる」

もう一度後ろを見る。幸樹の隣、狙撃銃を構えたマナが辰也の目に飛び込んで来た。その姿に少しだけ苦い顔を作って、辰也はまた土煙りの方へと駆け出した。

「それより俺は俺の仕事」

先程の速度よりもう少しだけ速く、辰也は地面を蹴る。

「夢の中へ、夢も中へ、いつてみたいと思いませんか」

狙撃銃を思わず地面に落としたマナは膝を崩し、地面へとへたり込んだ。そんな彼女の肩をやさしく幸樹は抱きしめる。汚れた頬を手でぬぐい、腰まで伸ばした黒髪を梳いて、真名を落ち着かせるように抱きしめる。

「ふふっふん」

もう一度、急激に加速した辰也の肘がテロリストの喉元へと突き刺さった。

「……………」

見事に奴隷商人たちから奴隷を解放する事に成功した俺たちは、勝利の宴ってことで凄まじく盛り上がっている。酒瓶を投げ合って歌を唄い、笑い声が辺りで木霊する。それは俺たち団体のメンバーと同じように解放された奴隷たちも、久々に与えられた、これからずっと続いていくであろう自由に酔いしれてるって訳だ。

「……………」

なのに俺の目の前の二人、ガキと幸樹は完全にお通夜モード。なんでかって？ そらガキが処女捨てたから。って性的な意味じゃねーよ。相手が誰だろうとさすがに引くわ。七つ八つのガキ相手に性的興奮を……とか、ありえねえな。やっぱり女は十代後半から三代前半のムチュ美人に限る。ガキ？ お呼びじゃねーよ。この俺のもっこりを満たすにやそれしかねえ。

「つーことで幸樹、せっかく任務成功した訳だし色街でも繰り出そうぜ。中東の美人さんと遊んでさあ、ぱーっといこうや」

「今の状況を解って、それを本気で僕に言っているだったら僕は君を軽蔑するよ」

「……………じょうだんですよーっ」と

色街は本気だが。たーく、誰もが通る道だが、これだから一般人はめんどくせーんだっての。俺みたいになっちゃう頃から人を殺す

のは当たり前だ！　みたいな教育受けとけばいいのにさあ。……イヤまあ俺の境遇は里でもちと特殊は特殊だったんだけどな。とりあえず慰めの言葉でも一つ。

「ガキ、見てみる。アレがテメエの守った人たちよ」

「……ん」

ガキはちらりとこっちに首を向けて、泣きながら笑う元奴隸たちを見つめる。

「辰也の言つとおりだよマナ。君は彼らを、そして僕たちを守ってくれた。そのお蔭で救えた命がある、笑えた命がある。やり方は間違っているのかもしれないけれど、マナのお蔭で今在る人たちがいる……それは誇りに思ふべきことなんだ」

「ほこり」

「ありがとうマナ、僕の守りたかったものを守ってくれて。ありがとうマナ、僕の夢を叶えてくれて」

「んっ」

くしゃくしゃと幸樹はガキの頭を撫でた。気持ちよさそうに目を細めるガキ。とりあえずは一件落着……といきたいとこだが、水を差すようではあるが俺も一言加えとかねえとな。余りにも幸樹の意見は綺麗すぎる。

「なーんてのは良い子ちゃんの見解。俺はんなこーしよーなもん掲げねえからよ、俺も一つテメエに俺の意見をくれてやっところ」

「いない」

「遠慮すんなや。ま、人間何か殺さんや生きていけねえんだ。今回偶々人間だっただけの話。お前が磨いた技術で生きていくために、もつと俗に言えば金を稼ぐために、人を殺したんだ」

「辰也、でもそれは……」

「まま、俺が話してるから後でな。と、もかくそんな考え方は誰かに駄目だ、なんざ言われるかもしれない。けどしかたねーじゃん、それしなきゃ生きていけねえんだから。だから俺は人を殴って人を殺す、その技術があつてそれでいいと思ってるから。報酬さえリスクと技術に見合えば仕事に貴賤なし、覚えとけ」

ガキは下を向き考える。さてはこの先このガキがどんな意見を自分の中にぶつ立てて、人を傷付け殺す戦場に身を置こうとするのか、それとも廃人になるか、その前に逃げ出すか。俺は未来が読める訳じゃねえからわからねえが……。

「じじいはくず、それはわかる」

やっぱこのガキうぜえ。それだけは間違いねえわ。

第二話 米、味噌、醤油こそ日本三大神器

「ああお姉さん、貴女は中東に咲く一輪の花。良ければ訪れるであ
ろう月夜に、俺と葡萄酒で乾杯しませんか」

「結構です」

褐色肌のグラマラスな美人は俺を振り払ってとつと先に。幾度
の戦場を超えてただの一度も勝利が無い。中々に今日は引つかから
ないねえ。さんさん振り注ぐ太陽が俺を照らす。熱い……冷たいビ
ールが飲みてえ。と、ナンパの極意はとにかく諦めないこと。声か
け、声かけ、声かけあるのみ！ ってことで心を立て直して次の美
人さんへ。お次は……少し厚着のお姉様。スレンダーに見えるがア
レはきつと着やセのはず。手鏡できりつと顔を引き締めていざ行か
ん、愛の夜の為に。

「お姉様、俺とお茶でもどうですか？」

「結婚してますので」

「それは……ならその溜まった欲望を俺が解き放って差し上げまし
よう」

パンと高い音。打ち抜かれた頬がジンジン痛む。ひっぱたかな
くてもいいじゃねーの。

「意味がわからない。やっぱりジジイは莫迦だ」

「はっ！ 素敵なお姉様と一夜を過ごしたいという気持ちが変わら

んとは、やっぱガキはまだまだガキだな」

「ガキじゃない」

「そこで突っかって来るのがガキの証拠だ阿呆め」

何故か道端の縁石に腰をおろしてじとーとこつちを見てるガキ。

何で俺のナンパについて来てんの？ って、幸樹が用事で出てるからか。置いてかれたとか……ま、何だかんだでガキだし。しかし俺も参加できないのは納得いかん。もうこの団体に来て一年半は経ってる訳だつてのに、まだまだ重要な案件の話し合いには参加させて貰えねえ。普通の作戦会議だったらしつかり出てるし、俺の意見も通して貰ってるから良いんだがな。幸樹はもう十年以上この団体にいる訳だから待遇的に納得はできるんだが……男の子の意地的問題？ アイツは幹部候補。ちょっぴり歯痒いぜい。

「そーゆーことは好きな人とだけするべき。ジジイはやっぱ頭がおかしい」

「そーゆーことってな〜んですか？ 俺わからない〜」

「そーゆーことはそーゆーこと。私はガキじゃないから知ってる」

「嘘ばかり、見栄はっちまってさあ」

「大きくなった男性器を女性器に突っ込む。あんあん」

「性教育間違ってんぜ幸樹い。イヤ、正しいのか？」

ガキより下になると六つくらいのが何人かいるから基準がわから

ねえな。上は十過ぎがいるがあれは男だし。女の性教育はよーわからん。まあそんな行為、団体の中でも夫婦はいる訳で恋人もいる訳で、いつもいつでもプライバシーのあるような環境じゃねえから見えちまうのは仕方ないのか。里のアイツはどーしてんだろ？ 教えてんのか？ どーだろ、タイプによるのか？

「で、何でお前が付いて来てんの？」

「拠点の外に出る時は団体の誰かと一緒に出るって幸樹が言ってた。ジジイ以外にはいなかった。私も不本意」

相変わらず可愛くねえガキ。俺と一緒にいたかったから……くらい言ってくれてもいいのにねえ。ツと、それは高望みしすぎか。べつ別にジジイと一緒に痛かった訳じゃないんだからね！ ……一緒か。まあ何となく買い物もしたかったし……これくらいが妥当か。その程度のリップサービスくれてもいいのに、たあ思ってみるがガキ相手に期待し過ぎか。ガキの反応じゃねえな、それは。

「ジジイ、私は食べたい物がある」

「だったらテメエの金で買え」

「幸樹に黙っててあげる」

幸樹は一穴主義だ。だから童貞だ。もってえねえ、アイツ顔は良いし性格も良いし立場的にも『マキシマル・マキシ偉大なる魔法使い』に近いんだからその気になればより取り見取りだろうに。だから俺がこんな風にナンプパして美人を引っかけようとするといちいち突っかかって来る。童貞の癖み？ 理想が高いだけ？ よーわからんが、その辺には突っ込まないでおこう。ちなみにアイツの好きなタイプは看護師系の

白衣の天使。この前怪我した時にちよつくら入院した病院の白人ナースに心奪われてたっけ。後で病院まで恋人と熱烈にキスしてるの見て灰になったのも今じゃ良い思い出だ。あの時は相当面倒だった
が。

「人殺しでしつかり稼いでるだろうが」

「お金は稼いでも貯まらない、貯めるから貯まる。ジジイに奢らせてやる」

「結構ですう」

しかし俺の任務は何時まで続くのか。そろそろ日本食が懐かしい頃合いだ。白米みそ汁焼き鮭たくあん、ああそれは遠い故郷のおふくろの……母親死んでたわ。里の味。最近ホームシックになんのは幸樹が幹部候補になって遊ぶ時間が減ったから？ まあ意外に俺って依存型？ 莫迦話ずつと出来るの相手は沢山作れねえし。

「もし、そこのお姉さん」

「はい、私でしょうか？」

次のお姉さんは三十路越えくらい。だがスタイルは……おっと、生唾物だ。顔もおっとり系でムラムラとそそのめるものが。ああっ、やわからかそうなのその身体を抱きしめたいっ！

「少し道をお尋ねしたいのですが……幾分と土地勘がないもので」

「あらあら、それは大変。それにしても今日は日差しが強いわね」

「よろしければ僕がいる間だけでも貴方の傘になりましょう」

「まあそれは素敵」

「……………」

褐色系中東美女キターッ！ 胸が素敵、腰も素敵、何より尻がとっても素敵！ ガキが呆然としてるが関係ねえ、そんなもんは関係ねえ！ さてはて今日はランデブー。とりあえずは喫茶店にでも行きましようかね。

「ガキ、おしゃぶりでも買って帰ってろ。俺は大人な夜を過ごすからな！」

「日本食がないなら日本食を作ればいいじゃない」

「それは楽しみなんだけど、僕は日本食の作り方は何も知らないよ」

このなんちゃって日本人が。高宮幸樹、なんて純日本人系の名前してるが苗字は日系人の団長に貰ったものらしいからな。幸樹は覚えてたらしい。でもま、幸樹なんて名前は日本人くらいしかつけねえだろうから、多分幸樹自身は日系なんだろうけどな。ちなみに日本は行った事ないらしいわ。表面上日本は平和だし、NGO団体が堂々として訳にもいかんのだろうか。

「お腹空いた。食べてやるからとつと作れ」

「うぜえ」

と、いつもの俺なら一つ二つ三つ嫌味を添えるんだが、今日の俺は機嫌がいい。嗚呼、女は男を豊かにさせる。昨日の夜は……素敵だった！

「つーわけで今日は親子丼を作ります」

「……………」

「んだ、糞ガキ？」

「なんでもない。とつと作れ」

ヘンなヤツ。ま、気にせず作るぜ。日本からこの団体に来る時、大量に持ってきたもんがあった。それは何か？ それは醤油と味噌！これがねーとな、やっぱ日本人は始まらねえってもんだ。朝例え米が食えなくてもみそ汁だけは飲みたい人間だからよ、俺は。その上に醤油は万能、異論は認めねえ。そう考えると大豆ってのはかなり優秀だよな。とにかく作る。酒やら醤油やら出汁で割り下を作つて、出来た割り下で鶏肉煮て卵というて完成。

「パンにかけるんだ」

「米がなかった」

「微妙。ワクワクを返せ」

前言撤回。米も日本人にとつちや必須栄養素の一つだわ。

組織というものは必ずしも一枚岩ではない。むしろ一枚岩である、という場合の方が少なかったりする。十人いれば十の、百人いれば百の考えがあるのだ。トップの思想に心酔して付いていく者もいれば、求める先が同じだから付いていく者もいて、他が嫌だから何となくという者もいて、嫌いだから適当にして甘い汁だけを吸うために、という者もいて当然のはずだ。大きな思想はいくつもの小さな思想が寄り集まり、おぼろげな形を作り出来る。これはどうしようもないことだ。

「なっ……！」

NGO団体『カンパヌラエ・テトラコルドネス四音階の組み鈴』もその例に漏れない。現団長の採算度外視でも苦しむ人々を人間亜人と種族に括らず救う、その思想を崇高なものとして身を粉にし活動に励む幸樹のような人物も幾人という。団長自身は魔法使いではなく戦士のため彼の称号を受け取ることが出来ないが、彼の妻であり本契約の相手である魔法使いは本国より『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』として讃えられている。15年ほど前に起きた戦争で連合軍が自軍の鼓舞と正当化のために打ち立てた『正義の魔法使い』に近いものではなく、ただ目の前の相手を救いたいからと足掻く『高潔な魔法使い』として。

「あなっ！」

しかし団長のその思想に諸手を上げて賛成できない者たちもいる。ある者は採算度外視の行動に疑問を持つ。非営利団体であるが故に、主に募金でまかなわれる資金にはどうしても限りがある。それを無視しても戦火に飛び込む団長の姿を悪いとは言えなくとも、良いとも言えない者たちが幾人という。ある者は救う順番に疑問を持つ。目の前で苦しんでいる者がいれば、その規模に関わらず団長は手を差し伸べる。消してその行動は否定できないが、それ以前に、1を救う前に10を救わなければと考える者たちが幾人という。ある者は救う種族に疑問を持つ。戦争の遺恨はまだまだ人々に根強く残っている。その戦争で人間に、あるいは亜人に家族や友を殺された亜人や人間がいる。割り切っているはずで、だからこそこんな団体に籍を置いているはずなのだが、どうしても割り切りきれない部分を持つ者たちが幾人という。

「死んだ……死んだ……殺したっ。これで、俺は……」

不意の一撃だった。男の手に持つ西洋剣からぽたりぽたりと血が滴りテントを濡らす。男は幹部の一人で、長年団長やその妻と一緒に戦場を駆け抜けた間柄。だからこそ団長は彼を疑うことなくテントに招き入れ、喉に切っ先を突き込まれて首をボトリおとされた。骨を断ち肉を裂く軌跡はそのまま団長の妻にも襲いかかり、美しい顔は右耳から左顎にかけて寸断されていた。

「これでいい……これでいいんだっ！」

戦友を殺した衝撃に跳ね上がる心臓。震える指先を無理矢理握りしめて、男はテントを後にした。空には白い星屑がぶちまけられ、赤い月はまるで男を見下ろしているようだった。唇を噛み、天上の

審判員から注がれる視線を避ける男は下を向く。

一歩一歩の歩みは鉛のように重かった。両耳にはいつもと変わらぬ、少しうるさいくらいの喧騒が過ぎ去っていく。

「あれ、こんな時間に出かけるんですか？」

「少し眠れなくてな。煙でも吸いながら散歩でもしようかと思ったんだ」

「今日は星が綺麗ですもんね。では、良い夜を」

にこりと笑い男を送り出した見張りに、自分が作り上げた事柄がばれているのではないかと疑心を抱く。足はさらに重くなる。だが歩かなければ、退路のない男に道はなかった。捕まれば、自分はどうのような仕打ちを受けるか。家族同然と過こしてきた者たちからの侮蔑と怨嗟の視線が降り注ぐであろうことは簡単に予測できる。

勘弁して欲しかった。そんな事態はご免こうむりたかった。これから男の行く先には何よりも輝かしい道があるはずなのだから。

気付けば男は街を抜け、キャンプを張っているのとは逆側の街外れに立っていた。息はまだ荒い。きよろきよろと落ち着きなく男は首を振る。どこか括くくるような視線を、自分の全てを受け止めて欲しいとでも言いたげに、揺れる瞳は右へ左へ。やがて二つの眼は一点を見つめ、ずるずると男は歩きだした。

「殺した、殺したよ君のために。君の敵は俺が討うつたよ」

男の視線の先にいたのは褐色の肌をした美しい女だった。薄ぼん

やりと月光に照らされた女は口を覆うように手を広げる。微かにその指先は震えているようだ。不思議な印象を男に抱かせる女だった。現実^{リアリティ}に在り、幾度となく触れ、抱きしめ、貪った。それでもどこか夢幻^{ファンタジー}のよう。芯の強い清廉な、だが実に蟲惑的な女だった。

「殺したの……本当に？」

「殺したよ、君のために」

「テロリストの娘が逆恨みしているだけなのよ」

「それでも俺は、君の悲しみを癒してあげたかった」

「ああっ！」

「泣かないでくれ。君に少しでも笑って欲しくて、俺はあいつを殺したんだから」

泣き崩れる女を男は抱きしめる。肌と肌が触れ合う。輝く涙が女の頬から男の胸へと染み込んでいく。なのにいつもより女は蟲惑的で、いつもよりもつと女は夢幻^{ファンタジー}のようだった。男は女とひと月前、この街に滞在してすぐに知り合った。一目見た途端に焼けるような恋慕を女に抱いた男は、自分の知る限り、あらゆる方法でアプローチを掛けた。そして男の情熱に女は答えてくれた。やがて、女は『^{カンパニエ・テトラコルドネス}四音階の組み鈴』がかつて壊滅させたテロ集団の、とあるテロリストの娘だと打ち明けた。それでも愛してくれるかと、戸惑いながら男に尋ねたのだった。

「逃げよう、二人で……どこか遠くで静かに暮らすんだ」

「無理よっ、貴方はきつと殺される。ここで逃げ切れてもいつかきつと見つかる。あの男を殺して、NGO団体を……世界を敵に回して逃げ続けることなんてできないわ!」

「俺が必ず君を守る」

「そんな言葉……私は、私は二度と私の大切な人の死ぬ姿がみたくないのよ」

頭を胸に預ける女に、男は強く肩を抱きしめる。目の前の女が消えてしまわないように、必ず捕まえておくために。

女の影が少し伸びる。男と女の唇が重なる。

「決めていた……貴方が帰ってきてくれたら、本当にあの夜の約束を果たして帰って来てくれたら……。口ばかりだと思っていたのに」

「君のためだ……俺は何にでもなれる」

「だったら行きましょう。二人でずっと、静かに暮らせる場所に」

「ああ、いつまでもずっと一緒だ」

男は腰にさげていた西洋剣を地面に投げ捨てた。身体を廻っていた気も完全に断った。二人の間にはダイナマイトが一つ。そして火が点けられた。

爆発の後、現場に残った二人を示す手掛かりは男の愛剣ただ一つだけだった。

第三話 組織の面倒な事情に末端は巻き込まれていく

「仮契約、しようと思うんだ」

「へえ、いんでねえの。誰と？」

「私。文句あるのかジジイ」

「べつつにい」

平らな胸を張るマナを一瞥し、神妙な顔で告げる幸樹に辰也は視線を向けた。幸樹は偉大なる魔法使い候補として扱われる高位の魔法使い。未だに魔法使いの従者がいなかったということが驚かれるほどに優秀な男だ。彼は何かの分野にとりたてて秀でていて、という訳でもないが攻撃、防御、支援、回復の魔法を分け隔てなく高水準に使用できるバランスを持っている。悪く言えば華がないのだが、万能であるということは臨機応変な対応が出来るということであり、『紅き翼』の登場以降無駄にド派手な魔法を覚えたがる者が多い現代では酷く重宝されるタイプの魔法使いだ。

「ロリコンか？」

「違う」

「光源氏計画か？」

「違う」

幸樹がこれまで魔法使いの従者を特定の人物として指定しなかつ

たのは、第一に万能であるが故にである。前中後、すべての立ち位置で戦闘を行うことが出来る故に、すべての立ち位置での戦闘方法というものを自分の中で大まかにではあるが形作れていた。だからこそ特定の従者を定めて戦闘方法を絞るよりもその時々々の戦力、作戦、戦況に合わせた方が都合が良かったためだ。

「好きなのか？」

「マナの事だったら好きだよ」

「ぶい」

「妹のように思っているさ」

「いえーい」

「これだから童貞は駄目なんだ」

第二は先日殺された幸樹の育ての親である先代団長夫妻の影響からだ。魔法使いの従者は本来魔法使いの盾として、共に戦う相棒としてある者のことだがそれも今や昔。本来の意味を残し実践しているのは戦場に出る一部の魔法使いだけとなっている。もっぱら現代では主人従者の契約方法が接吻ということもあつて、将来を誓い合う恋人同士のための儀式として浸透しているのだ。先代団長夫妻は魔法界の魔法学校からそのままNGO団体『カンパヌラエ・テトラコルドネス四音階の組み鈴』へと入団していた。多感な思春期にはそんな知識が嫌というほど頭の中に飛び込んで来ていたらしく、従者を持つということはそのような意味、と幸樹は教えられていた。

「父と母を僕には守れなかった。だから残された家族は、かけがえ

のない妹は必ず守る……この契約は僕の誓いだ」

「ガキはそれで良いのか？」

「良い。家族になれた、私にホントの家族が出来た、私はそれが嬉しいから良い」

「じゃあいんじゃないの。二人にその意思がある訳だし、俺が口挟む問題でもねえしな」

ケケケと晒う辰也にマナは鼻を鳴らし、幸樹は苦さを含んだ笑顔を示した。

「辰也はこれからどうするんだい？」

「古巣に帰るさ。契約相手がなくなっちまったし、一年＋の契約だったしな」

「そうか……寂しくなるね」

人が死ぬという事柄が基本的日常である戦場。団長が死ぬ、ということも特別珍しい事態ではない。潰すならば頭から、というのは当り前の考え方なのだ。今回は内から湧き出た膿によって頭が腐った。NGO団体として、人のために働きたい、そうっておきながら働くのは所詮人間。良心を信じたかったから、その気持ちが本心からだと思えたかったから、迂闊であつた故に今回起きた事件に今後はその対策も取られていくだろう。何度とない失敗によって組織は少しずつ昇華されていくものなのだから。

「お前は？」

「残るよ、僕の家はここだから。救いたいから救う、団長の意志を継いで、いろんなところに目を向けながら必ず笑顔で笑顔を作れる組織にしてみせるよ」

「熱血漢だねえ」

ともかく、今回の事件は四音階の組み鈴に波紋を呼んだことは間違いない。辰也のように組織を離れる者もいる。幸樹のように意志を強める者もいる。マナのように誰かに付いていく者もいる。誰かの死により人々はさまざまな方向へ向けて歩きだす。

「また会おう、親友。離れていても心は一つだ」

「くっせーっ！ 何処よここ、便所か、ガキが屁でもしたのか？」

「してない、死ね」

「だから銃口をこっちに向けるな。あぶねーだろうが」

「あははははっ」

頬を膨らませるマナの姿に、今度は曇りない笑顔を幸樹は浮かべた。じろりと効果音でも背景に付きそうなほどきつく睨む視線は暖簾に腕押し、辰也はポケットから一枚紙を取り出してマナの口に押し込んだ。

「むじう」

「まあでも、どうしてもなんかあったら連絡くれや。良心的価格で

雇われてやるぜ」

「貧乏な僕には手厳しいなあ」

「それも無理だったら酒くれえ付き合つてやるさ」

ひらひらと手を振り、辰也は二人に背を向けて歩きだした。三人の道が再び交わるまで、辰也は、幸樹は、マナは、自分だけの道を歩いていく。他の誰でもない自分自身が決めた目的地に向けて、自分が選んだ道を、自分なりの歩き方で。

照りつける苛烈な太陽も、見渡す限りの砂地も、イスラーム建築もどこにもない。巨大なケヤキ製の木造広間に幾つか座布団が並べられ、老獺そうな男や女が腰を落着けている。下座には辰也を合わせて四人、十代後半から二十代前半の若者は姿勢良く正座し言葉を待っていた。

「まずは楽にして欲しい。そして礼を言う……この試みに参加してくれてありがとう、生き残ってくれてありがとう」

優しげな容貌をした眼鏡の男は上座より三人へと向けて深々と頭を下げた。白髪交じりの頭頂部は段々と持ち上がり、男はやがて正面を向く。その目には明らかに沈んだものが含まれていた。

「君たちには一年半の期間、日本の外に出てNGO団体の一員として活動をして貰った。この日本で長きに渡って積み上げられてきた技術を芯に、世界を個人として、関西呪術協会の一員として見て欲しかったからだ」

眼鏡の男は神妙そうな表情で、言葉を選ぶようにしてちくちくと紡いでいく。辰也を含む若者たちは、例えば国が選んだ留学生のようなものだった。関西呪術協会は古くから日本に蔓延る魔性を駆逐するための、護国を基にした呪術機関である。その発端は陰陽寮の時代まで遡り、時の陰陽頭である土御門晴雄が没してから一度解体され、再び『日本呪術協会』の名前で構築された。だが直ぐにそれは現在の関西呪術協会という名前へと変わる事になった。

長く江戸幕府が続けていた鎖国の歴史に終止符が打たれ、明治改革の波とともに日本へと入って来た西洋魔法使いたちの何人かは日本で恋をし、子供をもうけてそのまま腰を落ち着け、関東魔法協会という彼ら自身の組織を作り上げた。時の政府は古きを棄て新しきを得ることを第一義としていた。そのため政府は陰陽寮を解体し、再び作り上げられた日本呪術協会も西洋魔法使いたちの行動を大きく考慮に入れて、関西呪術協会という名前に改めさせたのだった。

この政府の行動は日本にいる古くからの業を受け継ぐ者たちを怒らせた。これまで骨を砕き身を粉にしてまでお国の為、お国の為と戦い続けていた彼らを政府は蔑ろにした。不満は爆発し、西南戦争の裏で関西呪術協会は関東魔法協会と全面戦争が行われた。結果関西呪術協会は幕府軍と同じく敗北を叩きつけられ、日本の聖地のひとつである世界樹近隣を彼らの拠点とすることを許す事態となったのだった。

「遡れば明治維新、歴史の裏で私たちは敗北を帰した。だが正面よ

りぶつかり負けた、その事実を私たちの先祖は真摯に受け止めた。古くより受け継いだ高潔な精神、それを私は誇りに思う」

それは双方の陣営に甚大な被害を与えた大戦争だと、関西関東両方の歴史書は語っている。しかし同時にその戦争は日本の業の奥深さを世界に示すことにもなり、負けることは負けたのだが極東の神秘として日本の術者たちは讃えられる事となった。当時の関西呪術協会は突き付けられた事実には頭を下げ、快く世界樹を任せたと記す歴史書もあるほどだ。多少の遺恨は残しながらも、両協会はそれなりに有効な関係を築いていた。二度に渡る世界大戦の折も、手を取り協力しあっていた。だが。

「ここににいる者たちの一部が、もしくは多くが、あるいは全員が、関東魔法協会を快く思わない理由は私自身も解る。私も当時その発言を耳にした時、幾度ゲートを突き破りあの豚に刃を浴びせてやろうかと思ったほどだ。仲間を、親を、子を、道具として扱われるその屈辱！……私にも、痛いほど解る」

眼鏡の男、現関西呪術協会会長である近衛詠春は拳を握りしめて、大きな塊を吐き出すように言葉を零した。詠春は今から十数年前、とある戦争に参加していた。それは魔法使いたちの世界で起きた、古くから魔法使いの世界で暮らす民とその世界に移り住んだ民との間で起きた民族戦争。古き民は新しき民に虐げられ、自分たちの文明が生まれた地すら取り上げられた事をいつも不満に感じていた。二つの民族の領地教会では小競り合いが頻発し、それは遂に全土を巻き込む戦争にへと発展した。

詠春自身はただ単純に戦争によって苦しむ人間を減らしたかった。第二次世界大戦の広がりを抑えるために奔走した父の話聞き、純粹な気持ちでその戦争へと身を投じた。しかし　そんな、本来関

西呪術協会とは大した関わりのない戦争へと歩んでいった者たちの気持ちを踏みにじる男がいた。男は当時の関東魔法協会の理事長だった。

魔法世界での戦争、『ベルム・スキスマティック大分烈戦争』において新しき民は古き民の技術力と底知れぬ潜在能力の前に風前の灯まで追いやられていた。新しき民は、魔法使いたちは負けそうであった。だが今まで奴隷として虐げて来た者たちに負ける訳にはいかなかった。そんな中、本国と魔法使いたちの間で呼ばれるメガロメセンブリア出身の関東魔法協会理事長であった男は、実に下劣な考えを思い付いた。

男曰く、関西呪術協会は関東魔法協会に敗北した。故に関西呪術協会は関東魔法協会の傘下であることと同義である。関西呪術協会は即刻有望な人材を戦争に送り込むこと。

当時の関東魔法協会理事長の発言によって日本の裏世界に激震が走った。そしてその衝撃は、親魔法使い派で穏健派だった当時の関西呪術協会会長の即合意によって更に激しくなった。多くの旧き業を持つ日本人が戦場へと、一番の激戦区であったグレートブリッジに送り込まれ、敵の攻撃で、味方の超広範囲殲滅魔法で命を落とした。後の調査で彼ら二人は癒着しており、間を巨額の金銭が飛び交っていたことが判明した。

「関東では当時副理事長で現在理事長の近衛近右衛門氏がすぐさまあの男を更迭し、こちら関西では前会長が首を刎ねる、という少し過激すぎる方法ではあったが流れを止めることに成功した。だが、その命令が下されてから僅かの間で失われた命はあまりにも……多過ぎるっ！」

関西呪術協会の主要戦力、その半数以上がひと月足らずの間に戦

場に押し込まれ、命を落とした。当時の二人は既にこの世にはいない。二人の考えに賛同した者たちも、戦争後の刑事裁判によって処刑されている。だからといって解決するような問題ではない。人の想いは深く、長く続いていく。

「関東魔法協会のある麻帆良、そこに襲撃を仕掛けている人間が関西呪術協会内部にいるのは知っている。拭い切れない怨嗟があるのは、私とて理解しているつもりだ。だがそれではいつまでたっても変わらない、私たちはそれでも変わらなければいけないのだ」

詠春の言葉に座布団の上の重鎮たちはびくりと反応する。ある者は詠春を睨みつけ、ある者は遠い目をし、ある者は並ぶ四人の若者たちを見つめ、ある者は目を閉じる。それぞれの反応の後、再び詠春は語りかけるような口ぶりで言葉を発した。

「だからこそ私は個々人ではなく、関西呪術協会という大きなまとまりとして、何処からか口を添えられたからではなく、自分たち自身から生まれた意志として、外の世界へと力を添えていきたいと思っている。だからまずは若い君たちに……そう思つての今回の行動だったのだが、結果として十人は四人になってしまった」

木造の広間は静まり返る。いくらかの沈黙の後、笑顔を浮かべて詠春は問いかけた。

「聞かせてくれないか。君たち自身の目で見て、肌で感じたその想いを」

一人は長い黒髪を大きな三つ編みにした女。大きな丸眼鏡をかけて、胸元をざっくり開けた扇情的な和服の女。

「名門天ヶ崎家の血を引く陰陽術士、天ヶ崎千草」

一人はつんつんした黒髪からかわいい犬の耳がぴょこんと飛び出した男。上下学ランの、生意気そうな男。

「狗族の血を引く狗神使い、犬上弘太郎」

一人は白木の太刀を脇に置いて、美しい黒髪を流す女。巫女服に身を纏ったにこやかな女。

「京都神鳴流が剣士、青山鶴子」

一人は黒髪を後ろに撫でつけた目付きの悪い男。いつもと変わらぬ無然とした態度でジャケットなんかきている男。

「甲賀中忍、景山辰也」

四人を順々に、一様に見やって、詠春は口を開く。

「聞かせてくれ、飾りげない君たち自身の言葉で」

第三話 組織の面倒な事情に末端は巻き込まれていく(後書き)

十話くらいで原作予定、五十話くらいで完結予定。
納めれるように頑張ってみる。

第四話 正義とか悪とか正直どっちでも良い

「きっぱりと言わして貰います。私は関西呪術協会として魔法使いたちに協力する義理はどこにもないと思っております」

口火を切ったのは陰陽術士、天ヶ崎千草。彼女はじいと詠春を見つめ、はんと軽く鼻で笑ってみせた。不躰な行動に重鎮の幾らかが強い視線を千草に向ける。しかしその非礼を受けた当の詠春は、にわかには色めき立つ重鎮たちを手で制し、彼女を咎めることなく言葉を促した。

「どうして、千草くんはそう思うんだい？」

「そら……いや、その前に一つよろしいか」

「私にかい？ 私の答えれる事ならば答えるが」

「それなら聞かせてください詠春様、正義って……なんでつしやる？」

正義という言葉は日常の様々な場所で顔を出す。私たちは国民のために働く、と政治家が正義を語る。祖国解放のために立ち上がるのだ、と本の中の騎士が正義を語る。法に外れたお前は刑務所の中で悔い改めろ、と検事が正義を語る。大義は我らにあり、と過去の武将が正義を語る。お前は悪い子だ、と親が正義を語る。自分の信じるものこそ本当の正義だと、誰かは語る。

「人の行すべき社会的道義のことだ。仁義礼智信に基づく人格をもって道理の通った法に従う心、個人、集団、それによって成り立つ

社会こそが正義だと私は思うよ」

「随分とした、綺麗事で」

「綺麗事こそ正義だからね。例え汚い事柄だとしてもその威光で覆い隠す、そんな強い意味を持った言葉さ」

正義という言葉の意味は昔から幾度となく論じられてきた。様々な哲学者が、様々な形で正義を表現してきた。ここでイギリスにおいて主に19世紀に活躍したアイルランド出身の劇作家にして社会主義者であった『ジョージ・バーナード・ショー』の言葉に注目してみようと思う。

彼曰く、人が虎を殺そうとする場合には、人はそれをスポーツだといい、虎が人を殺そうとする場合には、人はそれを獐猛だという。罪悪と正義の区別も、まあそんなものだ。

正義は自分の立場によって変わる。悪辣と貶す相手も同様だ。例えば貴方が無理矢理に女性を連れていこうとしているチンピラを見たでしょう。通行人は誰もが見て見ぬふり。女性の嫌がる表情と声が貴方の耳に飛び込んでくる。貴方にはそのチンピラを倒せる自信と裏打ちされた実力があつた。貴方は正義感に多少の下心を混ぜ込んで女性とチンピラの間に入り、チンピラを殴りとばした。しかし、一日後に貴方は刑務所にいた。正義は貴方自身のはずだ。悪辣と貶すべき相手はチンピラのはずだ。だが暴力が何よりも悪、とされる場所に貴方がいたとすれば、誰よりも貴方が悪となる。

正義という言葉は強い意向を持つ割にその境界は酷く曖昧である。三つ巴の戦争が起きた時、三つの国すべてが私たちこそが正しい、私たちこそが正義だと謳う。後の歴史には勝った国こそが正義とし

て残るのだろう。だが本当は解らない。もしかしたら負けた国の方が正しい主張を持っていたのかもしれないが、すべては灰の中に消えていく。

「だから私は思う。自分から正義と宣言する人の中に正義はない、他人から称される人にこそ正義はあると思うよ」

問いに答えた詠春はじつと顔を見つめてくる千草を見つめ返した。少しの後、千草は顔を伏せる。何か感じ取ってくれたのだろうか、そう詠春が思っていた矢先、くつくつとした小さな笑い声が木造広間を這っていった。

「毒され取りますな、詠春様」

「……どういう意味だい？」

「そのままの意味です……魔を携え魔を狩る人間が正義だの悪だの、下らん論争を。まるで普通の、堅気の人らみたいに」

ぞわりと肌寒い風が広間を駆け巡る。骨を舐め肉を這い魂に触れるような風はひゅー、ひゅーと閉ざされているはずの広間を駆け巡る。

「道理など無い不条理の中、生きようとものがく蛆虫……それが私らのはずやろ」

千草はずりいと刷り上げるように顔を上げ、音なく立ち上がった。

「中庸中立の果て、それでも人間らしく生きようと持った仁義礼智信。基づいて混沌に沈み過ぎた者をさらなる混沌で飲み込む……そ

う在るべきなはずやろ」

「それは……しかし、今は時代が違う」

「それがどうしたんや？ 時代が違うのが受け継ぐ業は同じ、幾度も繰り返された不条理の中で生み出された業を私らは、そして魔法使いさんがたは身に刻んできとるんやろ」

吹く冷え切った風は千草の周りをぐるりぐるり周る。後押しされるように、千草はまた口を開く。

「それやのに私たちは良い人なんですよとも言いたげに、人を助けて。果たすべき姿勢が違うやろ？ ……あの戦争の後処理もそう」

千草は関東魔法協会によって突き付けられた赤紙に、両親を殺されていた。目の前から日常を奪われた。陰陽の名門『天ヶ崎』の家に生まれた千草は、この世に現れた瞬間から混沌の中に、泥の中に身を沈めるのが決まりきっていた。陰陽術士として裏から政界に、財界に、占術の名手として、あるいは殺人鬼として。

だが千草は幸せだった。英雄だろうと殺人鬼だろうと母親の母乳で育つのが世の常。子供として両親にありつただけの愛情を注がれて、千草は幸せだった。

父母が死んだ時、まだ五つ六つであった千草ではあるが、その意味は理解出来た。注がれる愛情は断ち切られた、奪い去られた。それでも千草はその不条理を自分の中で噛み砕いた。蛆虫だから、混沌の中でもがく蛆虫だから。幼いころから両親にそう教わり、蛆虫は簡単に消し飛ばされるということを知っていたから。その当時は年相応に泣いた、喚いた、怒り怨んだ。だが齢を重ねるにつれて、

立派な蛆虫へと成長した千草は両親の死を割り切った。

そして同時に彼女の目に入っただのは、蛆虫の仁義礼智信を忘れ、人間になろうと混沌の外へと泳いでいく魔法使いたちの姿だった。信じられなかった、理解できなかった、千草には彼らがわからなかった。

「まとめて幹部の首差し出すか、拷問の御膳立てして関西に送ってくれるっちゅうのが仁義やる。やのにそんな事もせず、あまつさえ犯した非礼を償うため誠心誠意社会に貢献しようと思っている、やって…… あははははっ！ 笑いしか浮かばんわっ！」

犯した罪を償うということ、その奉仕はどこに向けばよいのだろうか。社会、あるいは被害者家族。社会だと公言して、それを被害者家族は許すだろうか。深く暗い蛆虫の社会で、それは成り立つのだろうか。

「NGO団体作ってヒーロー気分味わう前にする事があるやろが。蛆虫でもない人間もどきに協力やこうしとない。それに……何よりも蛆虫でなくもどきに私の父母を殺されたっちゅうなら、私は魔法使いを許せそうにないわ」

言い終わると千草は足を折り正座し、口を閉ざした。そんな千草にこれ以上の話を聞くのは無理かと判断した詠春は、苦くなっていた自分の顔を立て直し辰也へと問いかけた。

「辰也くんはどう思ったんだい、今回の事は？」

「里に寄ってから来たんですが、入金確認しました。また機会があればよろしく願いします」

「イヤそうじゃなく」

「そのままの意味です。報酬が仕事のリスクと自分の技術に合いさえすれば必ず完遂して見せます。日本全国、世界全土、例え誰からの依頼だろうと」

辰也の、何を当り前な、とても言いたげな発言に重鎮たちは苦言を呈す。やはり忍びは、そんな言葉が主のようで、聞こえる様な音量で辰也を貶す。

「静かにしてくれ、君たちとてそんな彼ら忍びに助けられて来ているだろう」

詠春の言葉に思い付く節があつたのか、ふつと言葉をかき消すように重鎮たちは口を閉ざした。そんな様子にかりかりと頭を掻き、辰也は少しだけ目を細めた。

「それが君の意見かい？」

「はい、自分は個人的にそう感じ取りました。変わりません、今までも、これから……忍びですので。忠義を誓う相手の予定もありませんし」

「ウチも辰也はと同じです。もちろんメインは京都、西日本になりますが頼まれて報酬さえ貰えれば日本全国世界全土まで、魔性駆逐に参ります」

言葉を被せたのは京都に蔓延る魔を駆逐することを目的として設立された武闘派集団、京都神鳴流の剣士である青山鶴子だった。に

こりと紅を刺されて赤くなつた唇を持ち上げて彼女は笑う。

「まあ強いて言えば、少なくともウチ自身は誰に頼まれようとも人は殺しまへん。魔性駆逐を旨としとるウチらがどんな事情にしろ人に対して殺し目的で剣を振るう……考えられんわ。ま、神鳴の錆びは神鳴で落とす、そこだけは例外やけどな」

ぎょろりと、一瞬の間だったが鶴子の眼、その白目と黒目が反転する。だがそれも見間違いだつたかのように、彼女は先程と変わらないようなにこやかな笑みを浮かべていた。

「ワイも一緒や！ 氣に喰わん奴はぶつ飛ばす！ 誰やろうとぶつ飛ばす！ ワイの中にあるのはそれだけやで！」

わはははっ、と豪快に笑う弘太郎を一目、出発前とほぼ変わらな意見と言う三人を見て、詠春は自分の意見に反対する千草が一番今回の研修で身を厚くしたんだなあ、と何となく悲しくなった。

「よくやったぞ、景山。流石は甲賀の傑物よ」

「お褒めに預かり恐悦至極です。では自分はこれで」

「まあ良いだろう。アフターという奴だ、少し付き合わんか。貴様如きでは一生入れんような店だぞ」

右腕で白磁のように美しい肌の京美人を引き寄せて、関西呪術協会の重鎮は笑ってみせた。ここは京都にあるとある料亭。総本山にて詠春の呼び出しを受けた後、辰也は時間を置いてこの場所を訪れていた。理由は先程渡された分厚い封筒。中には諭吉の描かれた紙が束になり入っていた。

「しかし貴様は長の考えをどう思う？」

「自分は先程の会合の通りですが」

「ハッ、なんとも忍びらしく下種で現実的な考えよ。まあ構わぬ。日本の将来を憂う儂らとは身分が違うからの」

くびとお猪口に入った高価な日本酒を一口、がはたと重鎮は笑う。その姿に芸子姿の京美人はすりりと胸元に顔を刷りよせた。

「しかし天ヶ崎の小娘は良いことを言った。儂らには儂らの法がある。何も下にし、這い蹲らせようとは思わぬが、それに準じ儂らと同等の報復を受けるまでは魔法使いは淘汰されるべきであろうの」

「はあ、雇い主が減るのは困る事です」

「ならばいつその事、儂に忠義でも誓うか？ 貴様なら高待遇で雇ってやるう」

「……考えさせていただけますか？」

「よいよい、考えよ。ともかく……かん、かんかね」カンパヌラエ・テトラコルドネス「四音階の組み鈴です」それよ。よくぞその団長を殺してくれた。また頼むぞ」

「報酬が仕事のリスクと自分の技術に合いさえすれば」

重鎮は薄暗い部屋の中で腰を振る。いつも抱き、貪っているはずの芸子の身体はいつもよりずっと熱く、脳を蝕むような甘さを感じさせた。芸子は月明かりに照らされながら晒う。その姿は重鎮の腕の中にいるはずなのに、まるで夢幻のようで。

「ふっ、くっ……はっ……」

果てる精とともに、重鎮の命は夢幻へと果てた。

芸子は重鎮から身体を離し、こきりこきりと首を鳴らす。目の前の障子に人影が映る。すうと音もなく開き現れたのは寝息を立てる芸子を抱えた辰也であった。

「連れて来たのか」

「おう、処理もちゃんと済んでるぜ本体」

「そら結構。んじやとつとと済ませて逃げるとするか」

「あいよーっと」

裸の芸子は乱暴な口調で辰也に命令する。その言葉に従い、辰也は抱えて来た芸子の服を脱がし、その身体に何か細工を施していた。

「しつかり出されてるじゃねえか、本体よ」

「無駄口叩いてねえでとつととしろ。早く帰って寝たいんだよこつちは」

「へいへい」

裸の芸子の声は段々と太く、男のモノに近付いていく。やがてそれは辰也のモノと重なり、裸の芸子の姿は消えていた。代わりに眠そつな顔をした辰也がもう一人、その場に立っていた。

「終わったか」

「終わった。んじゃ本体、ちゃっちゃんと逃げようぜ」

「その前にテメエは消えろ」

「えゝっ」

「疲れてるの、解れや」

「理不尽だぜいそれむぶあつ！」

しゅんと芸子の身体に細工をしていた辰也は煙のように掻き消えた。やがてそこにいた辰也もふわあと欠伸を一つ、部屋には重鎮と芸子が一人だけが裸に剥かれて横たわっていた。

第五話 生き物の可愛さの基準は大抵大きさに決まる

「なんでっ、何で私がこんな牢屋に入れられなきゃいけないのよっ！」

「えっ、わからないとか何それ怖い」

「何をしたのよ私が！ 何なのよアンタは！」

「ごつごつとした石が削られ、敷き詰められ形作った牢獄の中。女は白磁のような肌が傷つくのもお構いなしに、握りしめた拳を木製の柵へと叩きつけた。薄い皮膚が破れ、赤い血が滴る。だが幾人もの血を吸った柵の柵は女の細腕にビクリともせず、ただ慚然と女の激情を受け止めていた。

「そりゃあ人を殺したからだろ。しかも関西呪術協会の重鎮を。やだねーそんな自己正当化なんざ」

「殺してない！ 殺してないわよ！ 人殺しなんてする訳ないじゃないの！」

カツと目を見開き、憎しみの念を込めて女は柵の向こうで首を振る辰也を睨みつけた。そんな視線をやれやれと辰也は溜め息で弾きとばす。責任逃れって怖いねー、とでも言いたげに。

女は京都にある、とある料亭に所属する芸子だった。関西呪術協会御用達の料亭。当主から女将、料理人から芸子に至るまで、ある程度裏世界に関わったそれなりの実力者が肩を並べている。有事の際はそんな所どころの結界の張られた場所よりも強固で安全だ、とも

評価されている場所だ。

そんな料亭の一室で、関西呪術協会の重鎮の一人が遺体で発見された。つい数時間前の話だ。第一発見者は今辰也の目の前で喚く芸子の同僚。いつものように昨日重鎮が芸子と楽しんでいた部屋に、起こせと言い聞かされていた時間になったため訪れたのだ。

部屋の中にいるのは助平で有名な重鎮。引きずり込まれて剥かれるのか。その時芸子の同僚は重鎮が料亭を訪れた日ならば当り前のように起こる行為に、少しの気だるさを感じながら部屋の前に座したそうだ。しかし呼びかけて待てど待てど、中から返事は返ってこない。部屋の中から音はしない。流石に不思議がった同僚が襖を開けると、息を引き取り冷たくなった重鎮と死んだように眠る芸子の姿があった。

「でもよう、テメエの女陰から毒が検出されたんだよ……お前が重鎮を死に至らしめた毒と同じもんが。その上テメエからは多量の睡眠薬。こら愛憎の縛れからの無理心中とみるのが当然だろ」

「違うつつ！ 違うつつ！」

「だがテメエは殺した男を愛してるだの、抱かれて幸せだの漏らしてたんだろ……売女のくせにいつちよ前に」

「ちっ、違うつつ！」

「動揺したな？ テメエは常連さんに叶わぬ恋慕を抱いちゃった。地位も名誉もある、家庭も妻も子もある男に。だからせめてあの世で一緒になろうとした。だが言っただけきくと聞いてもらえねえ、だから殺した……俺の推理、間違ってたか？」

「違うつ！ そんな事、私はしないっ！」

にへらと辰也は無神経に晒う。その笑顔は芸子の神経を逆撫でさせ、更に芸子はヒートアップする。しかしそれがどうしたと、辰也はにやにやと厭らしく顔を歪めた。櫓の柵の間から芸子の手が飛び出し、辰也を掴もうと遮二無二に振り回される。しかし必死の抵抗は空を切り、揺らぐ風も辰也の眉ひとつ動かす事は出来なかった。

「ま、そんな言い訳はあちらさんにしてくださいな。おねーさんがどれだけ恋慕の情を持ってたか、熱弁してあげればいいーじゃねえか」

くいと辰也の顎が差す。その方向に芸子の視線が移った時、彼女の手は凍ったように固まった。

「この女が貴女様の御主人を殺した諸悪の根げ「どけ下種」仰せのままに」

すすすと辰也は二歩三歩と下がる。憤怒に彩られた気が、冷たい牢獄を焼き尽くす。伸び固まった芸子の手をめしりと掴んだのは、皺の入った皮膚で包まれた女の手だった。ぎちぎちと、枯れ木のような指先が白磁の肌に食い込む。狂乱していた芸子の表情は徐々に垂れ下がり、泣き笑いの顔面が張り付けられた。

「わっ、私じゃありません……違うんですっ！」

「随分な好き物なのね」

「違うんです奥様！」

「大丈夫、私が良い方を紹介してあげるから」

皺の入ったの手は芸子から離れ、印を切るように六方星に振られた。芸子は笑う。ボロボロと大粒の涙を零して。慈悲を願い請う想いを視線に乗せて。皺の入ったの手の持ち主は嗤う。とてもにこやかに、泣き喚く子供をあやすように。

六方星が描かれた時、芸子の前には一匹の蝦蟇がいた。泥をぶちまけたような茶色の皮膚。ぶつぶつと皮膚中に張り付いた疣からはじゅくじゅくと黄色い汁が滴り落ちていた。ぐうえと蝦蟇が大きな口を開けて鳴く。赤黒い舌は口中に溜められた薄汚い粘液に浸かり、鼻の曲がる酷い臭いがした。蝦蟇の舌先が芸子の頬を撫でる。その先端はまるで男根のように太かった。

「きつとすぐに良くなるわ。だって貴女は好きだもの、ね」

皺の入った手の女は優しく笑う。ひきつった芸子の声が辰也の耳に飛び込んでくる。芸子の視線が辰也を捕らた。縋りつくような視線。それをひらひらと振る手で弾き返し、くるりと踵を返した。

「いつ、いやああアッ！」

芸子の叫びが辰也の背中を叩く。しかし気にすら止めずに、辰也はすいすいと歩みを進める。

しばし距離を稼ぎ、芸子の叫びも風が木の葉を揺らす程度になった頃。辰也はジャケットの内ポケットに手を入れて、ライターとマイルドセブンと書かれた青い箱を取り出した。ととん、と親指で底を叩き、顔を出した煙草のフィルターを口に咥える。そして手で風を妨げて、その先端に火を点けた。

ほうとうと白い煙は虚空に消える。景山辰也は忍びという職業に付いている。職業柄、煙草のように臭いの付く物は意外に気をつけなければならなかったりする。臭いが痕跡となり現場に残ってしまう、というのは愚の骨頂。プロとしてあるまじき行為である。なので辰也は煙草を吸うときはいつも、身体全体に薄い気の膜を張って臭いが付くのを防いでいる。口臭も気にするので口の中も言わずもがなだ。

「（しかしこれは、いつも思うが吸ってる意味があるのかねえのか）」

ふむと煙とともに考えを飲み込み、まあどつちでも良いかと煙とともに考えを吐き出す。好きで吸っているのだ。自分はそれでいいと思っていて、既に必需品であるのだ。同じくジャケットの内ポケットから取り出した携帯灰皿に吸殻を押し込み、辰也はまた歩き出す。

入り組んだ木造建築を抜けていく。やがて石畳が門へと続く庭園へと辿り着いた。

「御苦労さまです。お金はいつもの口座に振り込んでおきましたので」

「どうも。では俺はこれで」

「聞かないのですか、何も？」

「何も、聞く必要がありませんので」

石畳の中ごろで辰也はひとりと足を止める。すぐ脇の庭園には竹箒を持った男が一人。何を隠そう、関西呪術協会の長、近衛詠春その人であった。

「彼は東の魔法使いや西の術者、それになんの関係もない一般の女性を慰み者にしていました。あの芸子もその暴挙に携わり、幾人もの命をその手で」

ぎゅいと竹箒を握りしめる。めしりと割れ、地面に広がる竹屑に詠春の苛立ちが示し表されていた。彼が関西呪術協会という旧き組織の長に就いて、まだ十年も経っていない。海千山千の傑物たちを相手にしてか、就任当初よりもいくらか痩せ、顔色も悪くなっていると辰也は感じた。

「これも私の力不足。あんなことを言っておきながら、君にこんな真似を……」

「……長様は、自分たちを貶すような綺麗すぎる善人ではありませんし、権力を牛耳ろうとするために働く悪人でもありません。必要だからと割り切り扱ってくれる、実に自分にとっては好感のもてる相手です」

沈痛な面持ちで告げる詠春に、辰也は努めて明るい声で振舞った。

「これまでも、歴代の長様方や重鎮の方々は自分たちを使って来られました。これから、きつと変わらないと思います。だからといって自分たちで権力を握ろうと、昔のネタで強請るつもりもありません」

自分を少し弱く瞳を燈す光で見つめる詠春に、辰也は足を揃えて

礼儀正しく頭を下げた。恭しく、臣下のように。だが力強く、武人のように。それ以上に静かに、忍びとして。

「光がより輝くからこそ、自分たちの潜む場所は多くなります。どうかこれからも関西呪術協会に栄光あらんことを」

「良くやってくれた。またよろしく頼むぜ、スナイパー」

「報酬が仕事のリスクと私の技術に見合えば、ね」

ほんと受け取った札束を懷に、褐色肌の女は小さく溜め息をついた。何度となく繰り返し返したやり取り。自分の、戦場で磨いた技術で人を殺し、金を稼ぐ。その昔、女が貶し小馬鹿にした男の言った通りの方法で、男の言った通りの台詞を依頼者に返し、女は戦場を渡り歩いていた。

たった一人、いったいどれだけの戦場を渡り歩いたのだろうか。いったいどれだけの屍を築きあげたのだろうか。いったいどれだけの笑顔を奪ったのだろうか。いったいどれだけの間、自分は笑っていないのだろうか。

右手には武骨な銃器を、左手には笑う二人の家族を、唇には血の味、背中には亡骸を。

ハードボイルドに、固ゆで卵に、仕事人として割り切って戦場を渡り歩いてきた。笑わなくなったのは一種の自己防衛本能からだろう。笑ってしまえば、女は自分自身が壊れてしまいそうな気がしたから。肉袋に穴をあけて、へたり込ませる毎日。兄が目指した高潔な理想は、綺麗すぎて女には持ち切れなかった。幼い女が背負うには、あまりにも大き過ぎて、あまりにも重過ぎた。

女は依頼人と別れ、自分が宿泊しているホテルの一室へと辿り着いた。肩に掛けた重いバックを落とし、一人で宿泊するには有り余る大きさのベッドへと倒れ込む。全身を包み込むやわらかさに、女はムズ痒い違和感を感じた。

すると何を思ったか、女はかけ布団をぐるぐると丸め始めた。そして二つ、円柱を作り上げると床に並べ、その間へと滑りこんだ。圧迫感が左右から迫る。だが女はその圧迫感が心地よく、プチリと糸の切れた人形のように意識を飛ばした。

まどろむ頭が覚醒した時、女の視界に光の消えたカードが見せつけられた。女が兄と家族となり、兄が理想を誓ったあの日。女があの男と別れたあの日。三つに分かれた道の一つは三か月前、完全に消し潰されていた。

女は精神的に限界に近かった。来る日も来る日も肉袋に穴を空け続ける日々は、想像以上に女の芯をすり減らしていた。女はまだ幼い。肉体的にはそこの大人顔負けの身長、スタイルに無駄に成長しているが、精神的にはまだまだ子供だった。幾ら修羅場をくぐって来ても、命の危険にあったとしても、人によりかかって我が儘を言いたい年頃なのだ。女はまだ十代前半だ。

だからそれに手を付けた。首に掛けたペンダントの中、優しく笑

う兄と馬鹿みたいに笑う男の写真。その裏側に隠していたメモを取り出した。宝物を扱うように丁寧に、早鐘を急に打ち出した心臓を鎮め、広げたメモには三、四、四の数字が羅列されていた。

女はその数字を頭に刷り込む。何度も何度も頭の中で反芻させ、声に出して呟き、指で虚空を描いた。そしてゆっくりと受話器を手にも、番号を打ち込む。一度、二度、三度、呼び出し音が鳴り響く。それは亀の歩みのように遅く長い時間で、跳ねる兎のように早く短い時間だった。

そしてついに、その時は訪れた。

「あいあい、長瀬でござるよ」

日本語で問いかけてくる美しい電話の声に、女は思わず受話器を握り潰した。

第六話 年齢の割に老けて見られるのはもう必然

少女の前にはいつも青年がいた。生まれた時、自分を取り上げたのは青年だと聞く。夜泣きが激しく両親を困らせた自分は、青年にあやされるといつも熔けるように眠ったと聞かされた。嬉しいことがあつたらまず青年に報告した。悲しいことがあつたらまず青年に報告した。少女は青年の事が、幼い子供の稚拙な感情かも知れないが、心の底から好きだった。

少女はいつも青年の背中を追い掛けていた。だから少女は三つになり、まだ里の誰に言われるより前に苦無を持ってにへらと笑った。青年の立つ舞台に少しでも早く立ちたくて、ずっとずっと先にいる青年に少しでも早く追いつきたくて。薄い緋色の装束に小さな手足を通して、てかてかと森の中に消える青年を追いかけた。

青年が少女の前にいる時間はあまり長くなかった。里屈指の実力を持つ青年は任務で四方八方に飛ぶことが多かった。週に一度か二度か、長ければ一カ月にも一度も会わないことも稀ではなかった。だから少女は丁寧に、数限りなく青年から教わった拳動の一つ一つを繰り返した。青年がどこかに行く前に必ず自分がねだって教えてもらったそれを、少女は呆れるくらいに繰り返した。帰って来た時認められるだけになっていたら、頭を撫でて褒めてもらえるから。青年がご褒美だと買ってくれるコンビニのプリンが何より好きだった。

青年が任務で一年以上帰らないと聞いた時、少女は烈しく泣き喚いた。いつも青年の手伝いをし、ある大人にはすっかりしていい子だと言われ、ある大人には子供らしくないと言われ、青年にはどこでも良いと評価される少女は、巨大な堤防が決壊したかのように高ぶった感情を周囲にぶちまいた。三日三晩ぐずった少女にある

大人には聞き分けのない子だと言われ、ある大人には子供らしいと言われ、青年にはどーでも良いと笑われた。

幼い子供は純粹だ。本能的に、少女は青年が危ない目に合うかもしれないことを感じ取ったのだろう。いつも見つめて、いつも追い掛けてきた背中。それがふと、消え去ってしまいかもしれない。少女は嫌で嫌でたまらなく青年に縋りついた。そして少女は青年に殴られた。少女はその際に初めて骨を折った。

少女の小さな身体は頬に突き刺さった拳の力で軽々浮き上がり、地面に背中を打ちつけてごろごろと転がっていった。木にぶつかり、回転を止めた少女は呆然とした顔で青年を見つめた。いつの間にか鼻先に突きつけられていた青年の顔。瞳は泳ぐでもなく、少女がこれまで見たどんな青年よりも真剣に、どんな青年よりも鋭利に少女の眼を捕えていた。

青年は少女に告げた。お前は忍者だ、忍者は心に刃を秘める者だ。お前は秘めてもないし、刃は幻想に彩られた張りぼてだ、と。

青年が海を渡り、追いかける背中が無くなった少女は今まで以上に青年から教わったことを繰り返した。それと同時に少女は物思いに耽る時間が増えた。自分の刃はなんだろうか、何の為に刃を磨いているのだろうか。うむむと頭を悩ませるが、鍛練中以外はなんぶん回転の良い頭でなかったため、結局少女はなにも思いつかなかった。

なのでとりあえず、少女は刃を心に秘める事から始めた。まだ磨き切れていない、張りぼてと言われた刃ではあるが、青年が帰って来た時に頭を撫でて欲しかったから。良くも悪くも感情の出やすかった自分を、青年のように飄々とした人間へと矯正していった。ち

よっただけ青年に近付けた気がして、嬉しかったのは少女だけの秘密。

青年が少女の前に帰って来た時、少女は青年の遠さに愕然とした。青年に近付けたと思ったのはただの妄想だった。褒めてもらえる、と期待した自分がどれだけ浅く、軽かったかを痛感させられた。だが成長したじゃねえか、と笑う青年に頭を撫でてもらうのを拒否するほど少女は思いつめてもいなかった。

遙か遠くにいる青年だが、伸ばせば届くところにも青年はいるのだ。不相応だと手をひっこめる少女ではない。考えるより先に身体が動く、少女は行動派だ。

遠いならば追いかければ良い。少女は何時だってそうしてきた。簡単に見えるような背中ではない。簡単に追いつけるような背中ではない。簡単に追い抜けるような背中ではない。そんな相手を目指す事が出来る。それはきつと幸せな事だ。

だから少女は今日も心に刃を秘める。

「辰也、餡蜜を食べに行こう」

「イヤイヤ意味がわからねえ」

「せっかくこんな美人が奢らせてやると言っているんだ。答えないのは男として恥だよ」

ほんと青年が連れて来た、もう数ヶ月と里に滞在しているこの女。ぐいぐい青年の腕を引っ張り、ようやく膨らみだした自分のとは違う二つの毬を押し付ける女を横目で睨む。視線に気づいたのか、は

んと鼻で笑う女に少女は自分の胸を揉む。

自分の刃も磨く意味も理由も目的も、少女はまだわからない。だがせめて女の放つ弾丸よりも鋭くしなやかに。少女は今日も刃を探し刃を磨く。

「よう 鶴子、偶然だな」

へらへらと晒い、手を振る辰也に鶴子はじとりとする冷めた視線を向けた。

「そないな適当な言葉がよう吐けますな。ここ、道場でっせ」

「なんとっ！」

過剰なりアクションで驚く辰也に、鶴子の視線はより一層冷たくなる。おろおろと蹲り、小さく呟く辰也の演出。何をしに来たのか、呆れたご様子の鶴子は手に木刀を持ったまま辰也の方へと歩み寄った。突如として現れた余所者に、汗の染みついた道場を満たす少女の好奇の視線が二人へと注がれる。

「で、あんたらは何してるん？ とつとと素振りを続けいっ！」

好奇が大半を占める視線は鶴子の一喝によって散らされる。再び

少年少女たちは木刀を握りしめ、気合を張り上げ素振りを行っていく。振りかぶり、振り下ろす。一振り一振りに精魂を込めて彼女らの鍛錬は引き続く。ここは京都神鳴流の道場。京を護り、魔性駆逐のために組織された戦闘集団の総本山である。

「おお怖い、さすが剣鬼」

「刻んだろ？ 五寸ごとに」

「ごめんなさい」

ぺたりと膝を折り、頭を道場の床にすりつけるほど頭を下げる辰也に鶴子はめんどくさそうな視線を向ける。溜め息を一つ落とし、鶴子は辰也の右側に腰を下ろす。するとぐいと顔を持ち上げ、隣の彼女へ向けてへらと辰也は笑った。

「辰也はん、今日は何の御用事で」

「つれねえなあ、せつかく遊びに来たってのに。という訳で鶴子よ、俺と一発ぶるっ！」

「一発と言わずもつとどうや」

「ふいまへんでした」

鼻っ面に裏拳一発。ぐいりと反り返り、道場の壁に後頭部をぶつけた辰也は曲がった鼻を直しながら小さくなる。当の鶴子はにこにこ、いつもと変わらない笑みを差し出す。辰也は鶴子の顔をじいに見つめ、はぁと諦めたように首を落とした。

パンパンと鶴子が手を叩く。その音に少年少女は素振りを辞め、張っていた筋肉と精神をだらり緩めた。皆が皆、汗まみれの顔や身体をもう汗で冷たくなったタオルで拭き取る。将来、関西呪術協会直属の剣士として西へ東へ奔走する彼らの実力は、このような毎日の地道な鍛錬によりようやく実を結ぶのだ。

とはいっても、今この道場に集められているのは12歳以下の男女。幼稚園児や小学生の彼らにとって、魔性駆逐のために剣を振るうなどずっと未来の話。それより気になるのは今日何を食べるかだったり、何をして遊ぶかだったり、どんなアーティストが好きだったり、誰が好きだったり。そんなどこにでもある小学生らしい事柄。そして今は、いつの間にか現れた自分たちの美人師範と話す男について。

遠巻きに目付きが悪いわね、顔は六十三点よね、大事なものは収入よ、などと口々に漏らす女子に誰だよアイツは、師範から離れるよなどと淡い恋慕からの嫉妬を抱く男子。ひそひそ相談し合う声は段々と大きくなり、やがて何人かの気の強そうな女の子が二人の前へと歩いてきた。

「師範、この男の人とはどーゆー関係なんですか？」

ぴつと辰也を指差し告げる女の子。道場の喧騒はしんと沈黙に変わり、帰る言葉に誰もが注目する。恋人ですか、婚約者ですか、パシリアッシーお財布くんのどれですか、と少々過激な声も聞こえてくる。そんな様子に辰也はがしりと鶴子の肩を掴み、ニヤけた顔で自信満々に宣言した。

「毎晩毎晩肉欲を満たし合う爛れた関けいいるぼりっ！」

しゅぱーんと、妙に甲高い音が道場中に鳴り響いた。

「ただの昔馴染みや……なあ」

鶴子の眼の白目と黒目がぎょろり反転する。血に濡れた左手の甲をちろりと更に朱い舌で舐めると、女の子たちに詰め寄るようにして鶴子は言葉を打ちだした。いつもと変わらない声。それ故に女の子たちの背中を言いようのない悪寒が伝った。壊れた人形さながらに、道場内の少女少女は上下に首を振る。鶴子の隣で、在りもしないはずの軸を中心に正座のまま回転する辰也を視界に入れないように。

後頭部が床に叩きつけられた時、道場には先程の馬鹿騒ぎに加わっていなかった数人の門下生以外残っていなかった。まだまだ甘い、と逃げ去った者のことを憂いつつ、鶴子へ手を振り道場を後にする少女少女一人一人に挨拶を返す。やがて道場には辰也と鶴子以外、木刀も仕舞わず立っている少女一人となっていた。

「師範、うちもうちよつと練習していいですか？」

つり目の小さな少女は悶える辰也から距離を置き、小首を傾げて鶴子に問いかけた。

「そやけどもアンタはちよい経ったら大人たちの鍛錬に加わらなきやいけへんんやろ。休んどいた方がええわ」

「大丈夫です、どっちもやれます」

少女は真摯な眼差しで鶴子を見つめる。

「……まあええよ。アンタは今伸びとる、ほして気合もあるうちゅうにそれを止めるって言うのも野暮な話よな」

「師範つ、じゃあ……！」

「でも一つだけ。これ以上は無理、とウチが思ったら容赦なく止めるから、それだけはわかつとき」

はいっ、と小気味良く頷いた少女は再び道場の中央に戻り、木刀を握りしめて振るう。振り上げ、振り下ろす。その一振り一振りは宛ら真剣のような鋭さを見ている者に感じさせた。

「アレが例のガキか」

垂れる鼻血を拭い、起き上がって来た辰也は口を開く。鶴子は少女の挙動一つ一つを逃さぬように見つめていた。

「せやな」

「もう今更な話だが、わかってんだろうな」

「……わかつとるわ。ウチを誰やと思うとん」

二人は見つめ合うでもなく、少女の方へと視線を向けて言葉を交わす。先程の安穩とした空気ではなく、もっと殺伐とした空気の中で。

躊躇いながらも答える鶴子。その言葉に辰也は再び顔を崩し、にへらと笑った。

「なら良いわ。俺にや恐らく関係ねえことだしよう」

「ウチに用事があつたんでおまへんの？」

「まあ今忙しそうだし、暇になつたら連絡してくれや。別に急ぐことでもねえから」

そう告げると辰也は立ち上がり、くるりと道場の外へ向けて歩きだした。

「辰也はんこそ、気を付けた方がええで。甲賀に余所者がある……噂になつとるわ」

鶴子の言葉に、とある顔が辰也の頭の中へ浮かんできた。その昔籍を置いたNGO団体、そこで一緒だった元一般人現殺し屋のガキ以前に会った時と比べて格段に成長した肉体に、ちよっぴり辰也のもつこりが反応したのは誰にも気づかれていないはずだ。

少々閉鎖的な国である日本。鎖国した歴史を持つお国柄からかもしれないが、日本人は余所者に酷く反応したりする。それは人の流入が多い都会よりも田舎に根強く残り、旧き業を残す蛆虫に社会にも根強く残る。しかしふん、と興味無さそうな態度をありありと前面に押し出し、辰也は頭を掻いた。

「そもそもそこから違つんだよ。あのガキは甲賀にいるんじゃない、俺の家にホームステイしてるだけだぜ？ どこに問題があんだ」

「そう言つんやったらウチはそう思つときます……けど」

そこで一旦鶴子は口をつぐむ。しばしの後、じりりと軽蔑するよ

うな眼差しを伴ない一段上から辰也へと言葉を投げ下ろした。

「まだ十ちよつとの楓はんもおるのに、女連れ込むのはいかなもんでっしゃるな」

「あ？ あのガキも楓と同一年くらいだぞ」

「……え？」

それは鶴子の端正な顔立ちが、ここ五年で一番に歪んだ瞬間であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2407z/>

少年少女物語 + ただし魔法有り

2011年12月16日18時56分発行